第 25 回可視化情報シンポジウムの開催にあたって

社団法人 可視化情報学会
会長 田中 宏

Message to the 25th Symposium on Visualization

Hiroshi TANAKA

第 25 回可視化情報シンポジウムの開催にあたり、ご挨拶申し上げます。

このシンポジウムは、1973 年に開催された第 1 回「流れの可視化シンポジウム」以来毎年 1 回開催され、今回で第 25 回を迎えました。従いまして今回は、その発端から四半世紀目にあたる記念すべきシンポジウムであります。この間、当初の「流れの可視化シンポジウム」としての集まりは、1981 年に「流れの可視化学会」の設立へと発展し、さらに 1990 年には「流れ」のみならずもっと広範な事象の可視化をも視野に入れて学会名を「可視化情報学会」と改め、文部省から社団法人の認可も受けて現在に至っています。このように、当学会はこのシンポジウムを中心に発展してまいりました。ここに第 25 回のシンポジウムが開催されますことを、会員はじめ参加者の皆様と共に心からお祝いしたいと思います。またそれと共に、第 1 回流れの可視化シンポジウム以来、本学会とこのシンポジウムの発展にご尽力いただいた数多くの諸先輩並びに会員の皆様方にあらためて深く感謝の意を表する次第であります。

約 1 世紀前に始まった、初期の「流れの可視化」によって層流から乱流への遷移、流れの剥離やカルマン渦、衝撃波の挙動などが明らかとなり、これらが流体力学の発展に大きく寄与しました。その後長い間流れの可視化は定性的な流れの観察にとどまっていたましたが、近年、コンピュータによる画像処理やレーザーの利用などによる定量的な可視化が大変発達してきました。特に粒子トレーサの動きを画像処理することによって流れ場を定量的に計測する PIV が注目を集めています。この PIV については、つい先日、本学会と福井大学地域共同研究センターの共催で「第 2 回 PIV 国際会議 '97-福井」を開催しましたが、今回のシンポジウムでも多くの PIV に関するオーガナイズドセッションを組んでいます。このような活動を通して定量的な可視化が今後益々発展することを期待しています。

この他、今回のシンポジウムでは「Particle-Based Flow Visualization」(R. J. Adrian 教授)、「有翼宇宙往還機 HOPE の再突入飛行問題における CFD の役割と可視化応用技術」(山本行光氏)、「銀河衝突の可視化」(戎崎俊一氏)の三つの特別講演が行われます。専門的な可視化のお話から最新先端技術における応用、さらに宇宙規模の壮大な可視化まで、非常に興味あるご講演であります。これらのご講演や研究発表、更には懇親会を通じて、このシンポジウムが可視化情報学の発展に寄与するのみならず、会員相互の情報交換と親睦の場としても実り多いものであることを期待いたします。

最後に、このシンポジウムの企画、運営に多大のご尽力をいただいた棚橋隆彦委員長はじめ委員の方々*ならびに関係の皆様方に厚くお礼を申し上げます。

*シンポジウム委員会：棚橋隆彦(委員長；慶應義塾大学)、澤田達男(幹事；慶應義塾大学)、岡永博夫(幹事；東海大学)、塩崎孝壽(埼玉大学)、佐田 豊((株)東芝)、谷口伸行(東京大学)、西野耕一(横浜国立大学)、野口正芳(航空宇宙技術研究所)、日夏宗彦(船舶技術研究所)、水野明哲(工学院大学)、井門康司(名古屋工業大学)、川野浩一郎((株)東芝)、島田行太(東洋ラジエーター(株))、文沢元雄(日本原子力研究所)、安立利明(いすゞ自動車(株))、生田四郎(カルソニック(株))、石原知明((株)三井造船昭島研究所)、植村 健(旭硝子(株))、菅 正武(トヨタ自動車(株))、太田 有(早稲田大学)、村上和彦(東京都立大学)